
 学 会 記 事

第 22 回新潟 GHP 研究会

日 時 令和 2 年 2 月 8 日 (土)
午後 3 時 50 分～午後 6 時 40 分
会 場 ANA クラウンプラザホテル
新潟 2 階「芙蓉」

I. 一 般 演 題

1 ハイリスク妊婦の包括的支援における総合病院精神科の役割について

○深石 翔・横山 裕一・渡部雄一郎
横尾ゆかり・福井 直樹・染矢 俊幸
新潟大学医歯学総合病院 精神科

【背景】メンタルヘルスケアが必要な妊産婦は、全国で年間約 4 万人（全妊産婦の 4%）と推定され、地域行政機関、児童相談所、産科や精神科などの医療機関が連携して支援を行うことが重要である。それを受け、近年、精神疾患を有する妊婦に連携して支援にあたる取り組みを促進するため、診療報酬の改定が行われている。

【症例】20 代女性（発表に関して本人の同意を得ている）。既往歴、家族歴は特記事項なし。1 日 60 本の喫煙あり。五歳時に両親が離婚し、母に養育された。父とは定期的に交流していた。小中の成績は最下位であった。中学校卒業後は、アルバイトをしたが、長続きしなかった。X-6 年に交際相手と同棲しては別れ、「寂しい」「死んでやる」とリストカットや過量服薬をした。A 病院で境界性パーソナリティ障害と診断され、多剤併用（CP 換算 1400mg の抗精神病薬 4 種類、抗うつ薬 2 種類、気分安定薬、ジアゼパム換算 51mg のベンゾジアゼピン 4 種類など）による薬物療法を開始された。過鎮静のため、尿失禁、交通事故、1 日 10L の多飲水を認めた。X 年 7 月に妊娠が判明したが、交際相手とは既に連絡が取れない状

態であった。9 月に生活保護受給を開始し、独居を始めた。掃除ができず、家はゴミだらけの状態だった。11 月に当科を初診し、境界性パーソナリティ障害の疑い、軽度知的能力障害の疑いと診断された。12 月に薬剤整理のため、当科に任意入院した。入院時、妊娠 22 週であった。刺青が全身にあり、1 日 5 本の喫煙を続けていた。両親は育児に非協力的だったが、本人は育児に意欲的であった。薬剤を CP 換算 175mg、ジアゼパム換算 18mg まで減量としたが、精神状態は概ね安定していた。X+1 年 1 月に退院した。産後の育児支援のため、多職種カンファレンスが行われた。知能検査を行い療養手帳の取得を進めることや、産後の事故や虐待が予想されるため積極的な介入が必要であることを確認した。自ら育児をすることを希望していることを踏まえ、母子生活自立支援施設を勧めることとなった。

【考察】本症例は、知的能力の低さや未熟さといった母体要因、経済的な困難さ、シングルマザー、家族からのサポートが乏しいといった環境要因から、産後の虐待リスクが高いと予測された。このような精神科の問題を有するハイリスク妊婦には、精神科産科を有する総合病院、地域職員、児童相談所が、出産前から積極的な介入を要すると考えられた。

2 救外受診を繰り返す慢性疼痛患者に電気痙攣療法が奏功した 1 例

○橋尻 洸陽・大塚 道人・大竹 裕美
上馬場伸始

新潟県立新発田病院 精神科

【背景】ECT が開発された 1940 年代から、難治性疼痛に対する ECT の鎮痛効果を示した散発的な症例報告は多数存在するが、一方でそれを否定する報告もなされており、治療効果は確立されていない。各種薬物療法が無効であり、救外受診を繰り返していた慢性疼痛患者に対して ECT を施行し、著明な鎮痛効果が得られた一例を報告する。

【症例】42 歳男性。X-23 年に髄膜炎に罹患後から全身の疼痛が出現した。複数の医療機関にて